

文化的景観研究集会（第11回）

山の風景史

— 育成林のとらえ方とその保全 —

2023年9月1日（金） 13:00～17:20

会場：奈良文化財研究所大会議室（オンライン配信あり）

主催：奈良文化財研究所 文化遺産部 景観研究室



日本列島は、その面積の約3分の2が森林です。村落ではもちろんこと、都市の周縁部でも、山はどこにいても目に入る存在です。その中でも特に、スギやヒノキ、カラマツといった、人の手で植えられた育成林が目立ちます。真っすぐに伸びた円錐形の針葉樹が山一面を覆う風景は、いまや当たり前のものになっています。

人の手の加わった森林は、日本を代表する営みの場のひとつです。しかし、文化的景観の観点から各地域に関わる時、育成林業の取り扱いに戸惑うことがよくあります。文化財において価値があるということ、それはその価値を将来にわたって守るということになりますが、歴史を通じてみたときに育成林業は比較的新しい営みで、安定的なものとなっていないことが多々あるからです。

また、文化的景観では、農業を主産業としてきた地域は「農業景観」ではなくて「農村景観」と呼ぶのに、育成林に関わる地域では「林業景観」と呼びます。それは、前者がムラ（民居の一集団）とノラ（耕作する田畑）とヤマ（利用する山林原野）を一体としてとらえてきたのに対して、後者はヤマだけをとらえがちだったことも理由にあるのではないのでしょうか。こうしたことも、育成林業という営みの新しさゆえのように思います。

こうした針葉樹の山をめぐる戸惑いは、文化的景観だけでなく、史跡・名勝といった他の文化財の保存活用の現場や、景観計画の策定の際などでも見受けられます。山林の景観をどう理解し、どう取り扱っていきべきなのでしょう。

そこで、第11回目となる文化的景観研究集会では、この悩ましさと向きあうことにしました。日本列島の森林が人々との関わりのなかで歴史的にどのように変化してきたのか、そのなかで育成林業はどのように位置づけられ、保全を図っていけるのかについて、文化的景観に限らず、様々な立場で地域に関わる皆で考えたいと思います。

◆ プログラム

- 12:30 受付開始
- 13:00～13:05 開会挨拶 中島 義晴 (奈良文化財研究所)
- 13:05～13:30 【趣旨説明・報告】 惠谷 浩子 (奈良文化財研究所)
「育成林は重要文化的景観として評価できるのか」
- 13:30～14:30 【講演1】 大住 克博 (鳥取大学名誉教授／林学・森林生態学)
「林業景観の成立過程」
- 14:30～14:40 —休憩—
- 14:40～15:40 【講演2】 小椋純一 (京都精華大学名誉教授／景観史・植生史)
「里山景観の変遷」
- 15:40～15:50 —休憩—
- 15:50～17:20 パネルディスカッション
「山の風景のこれまでとこれから」
パネリスト : 大住 克博、小椋 純一、
菊地 成朋 (九州大学名誉教授／建築学)、
小浦 久子 (神戸芸術工科大学教授／都市計画)
モデレーター: 惠谷 浩子

◆ 講演者プロフィール

<大住克博>

愛知県生まれ。京都大学農学部林学科卒業。著書に『森林の変化と人類』(分担執筆・共立出版・2018)、『里と林の環境史(シリーズ日本列島の三万五千年—人と自然の環境史)』(共編著・文一総合出版・2011)、『森の生態史—北上山地の景観とその成り立ち』(共編著・古今書院・2005)など。

<小椋純一>

岡山県生まれ。京都大学農学部林学科卒業。著書に『森と草原の歴史—日本の植生景観はどのように移り変わってきたのか』(古今書院・2012)、『植生からよむ日本人のくらし—明治期を中心に』(雄山閣出版・1996)、『絵図から読み解く人と景観の歴史』(雄山閣出版・1992)など。

◆ 参加申込・お問い合わせ先

下記の申込先に、①氏名(ふりがな)、②所属、③メールアドレス、④会場参加 or オンライン参加、をご連絡ください。申込締切は8月25日です。

【問合せ先】 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 文化遺産部景観研究室

〒630-8577 奈良県奈良市二条町2-9-1

TEL 0742-30-6816

FAX 0742-30-6811

E-mail: keikan_nabunken@nich.go.jp